おほせのつとめ

天にも地にもかゞやきて　夜の間ひるの間とこしへに
てらすみ光かうむりぬ　われらいかにかむくうらん
聖きみむねをかしこみて　ねてもさめてもへだてなく
ふかきめぐみをよろこびて　命のつとめをつとむなり

いのちの葉

夜半のあらしのはげしきに　ふしたる草もいろかへて
時しも吹ける秋風の　からさでのこす野邊もなし
あなかなしかる秋風の　草のみどりもくれないの
もみぢもともに吹き落す　落てはへだつる色もなし
花もみどりの千ぐさをも　ちりぬかれぬと聞くからは

我身もいつか秋風に　ちりぬるものぞいのちの葉
我身千とせとたのみしに　いつまでこゝに有明の
月さへ西にかたむけり　たれもかたむけかのくに〻

光明攝化

教主釋尊出まして
ミオヤの光明を說き示し
アミダは永恒の光なり
諸佛菩薩賢聖も
如來は光明圓かにて
念佛衆生を攝め取り
衆生至心に信樂し

闇きに迷ふ子等がため
救の道を敎へにき
一切諸法の據る處
斯光にて得道す
十方世界を照しては
救靈ますこと極みなし
光明名號稱へつゝ

如來の慈悲を憶念し
早晩心光に攝められ
聖きみむねに滌がれて
光の中に安住む時は
神は淨土に栖遊び
ミダの光を得る人は
行住坐臥に如來を
三業四儀に作す處
命令の務と知る時は
深き惠に充されて
辱なさに動かされ
いよいよ此身の終りには

一ら救靈を祈りなば
罪に汚れし我とても
聖き人とは更るべし
身はまだ此土に在りながら
平和歡喜の極みなし
時と處の分ちなく
暫しも離るることはなし
皆悉く大ミオヤの
佛行ならざることやある
感謝の念より作す業は
己を忘れて進むなり
眞實報土に生るべし

彼處は光明永しへに　　照り輝ける寶國にて
常樂我淨の園生には　　眞善美妙の花匂ひ
父子相迎の朝には　　生佛一如の理をさとる
いとも寶こき同胞よ　　讃めよ稱へよ限りなき
生命と光明に在ませる　　天つ**ミオヤ**を稱えかし

如來讃

みだのみいづはきはみなく　　ひかりかむらぬものはなし
みちからひとりすぐれしと　　あらゆるほとけほめまつる
みだのみいづのみひかりと　　そのみさかえをほめまつり
つねにこゝろにたえせねば　　きよきみくにに**うまるべし**
あみだほとけのみひかりは　　てらさぬところなかりけり

みなをとなふるひとはみな　をさめてすてじとときたまふ
みだふかしぎのみさかえは　こちたのさときことのはに
たとへこのよのをはるまで　とくともつきじとのたまへり
くるしきうみにしづめるは　こころのやみのふかきにぞ
むゐのみやこにいたるには　あみだほとけをたのむべし
われらこころのやみふかく　はてしもしらでさまよひぬ
すくひのみなをとなふれば　ほとけよわれをたすけませ

因地願

われはほとけをえんまでに　あまねくちかひをおこなひて
すべておそれるもののため　おほきにやすきとならしめん
わがなすきよきみくにには　よろづのものもよにこえて

くにないをんのさかひには　　よにたくらぶるものもなし

清浄光

（人の感覺即ち眼耳鼻舌身に感染する光、感覺清浄となりて靈徹す。）

にごりにいでゝいさぎよく、さけるはちすのかほりこそ
　　きよき光に開れし、人の心の花ならめ
あかねさすてふ朝日影、みるもまばゆく輝くは
　　清き光に照らされし、人の心にたぐひてん

みがきて照すまにの珠、ねりてかゞやくこがねこそ
　きよき光にみがゝれし、人の心の色ならめ
雲をあらしに拂はせて、さやかにてらす秋の月
　きよき光に照されし、心のすがたにたぐひてん
富士のたかねに白たへの、雪のすゞしき色こそは
　清き光にみがゝれし、人の心のすがたなれ

歡喜光

（人の感情に感染する光。斯の光によりて心の苦惱うせて平和に歡喜にみちて
　うるはしき心情となる。）

くるしき海はかぎりなく、まよひはふかくそこもなし
　めぐみの船にのりえたる、人の心は安らけし

うき世のうみは廣くして、なやみの風ははげしくも
　　めぐみのみなとに船とめて、やすらふ心はやすらけし
朝日ににほふさくら花、八重こゝのゑはよろこびの
　　光に開きてうるはしき、人の心にたぐひてん
一たび開きてとことはに、かはらぬ色はよろこびの
　　光りにあひてうれしさの、人の心の花ならめ
天にも地にもよろこびの、光はあまねくみちみてり
　　心の花のひらくれば、とはにのどけき春ならめ

智慧光

（此の光によりて人の佛知見ひらけてあなたの聖きみすがたと聖きみむねとを示さるゝ）

知慧光をあふぎつゝ、心の水のすみぬれば
　こがねのすがた妙なりし、月のおもかげやどるなり
玉やこがねにかゞやける、きよきみ旨はさながらに
　聖き光にみがゝれし、心のかゞみにうつるなり
智慧光の日やてらす、さまやの窓のひらくれば
　無明にかくれしひめごとも、啓示さるゝなり悟るなり
妙なる法の身の月は、照さぬ所なかりけり
　まよひの雲のはれぬれば、わがのきばにぞながめえん

不斷光

（人の意志に被る時は野卑の情操うせて金剛の意志、靈化の道德心となりて活動す）

われらをすくはん爲ならば、ならくの底にしづむとも
しのびて悔ひじとちかひてし、そのみこゝろをあふげかし
われらがためにいくたびか、數をも知れぬ身をすぎし
ふかきめぐみと思ほへば、身をくだきてもむくはなん
つみにほろびしわれ〳〵を、すくふ方便をたてんとて
五劫に思をつくしたる、ふかきめ恵みを忘るなよ
神聖正義のみひかりに、くらしつゝある身としらば
聖きみむねをかしこみて、命のつとめをはげむべし
天にも地にもみちみてる、めぐみの光かむるなり
ふかき恵を思ほへば、感謝の心なわすれそよ

清淨光

朝日まばゆく照しては
如來の清きみ光は
さやかに照す月影は
如來の清きみ光は
清きみむねの浴池には
身に垢つけば浴みつゝ
塵にまみれし我が胸は
形の穢れは人眼に恥ぢ
清きみむねの鏡もて
無始にけがれし我がむねを
塵には日々に染みにける
紅顏眼にさえぎる時は

金剛石に反映し
念ずる心に輝けり
草葉の露に宿るなり
信ずる心に宿るなり
心の垢を滌ぐなり
衣にしみつかば濯ふなり
みむねの池に滌ぐべし
心の汚れは佛に恥ぢん
三たびわが身を返照せよ
さりとは自ら覺らずに
あな恥かしき我心
いつか心に染（　　）

淫聲耳に觸るゝ時は
不（　）にむかへば自ら
戀すまじきをも戀し
眼にふれ耳に對しては
己が心のきたなさは
げに恥しき我が心
たとひ滄海かたむけて
清きみむねのみひかりに
悔ひあらためてきよらけき
まことに〳〵己をさゝげ
清きみむねの功德池に
聖き心とよみ更へり

ゆるぎだす心のましら
かはる心のあさましや
想ふまじきをもおもふ
心を汚す便りなれ
若しも人眼にみへもせば
自らかへりみげにはづかし
滌ぐもいかで清むべき
己が心を恥らへよ
みひかりをたゞ仰ぐべし
みむねの水にそゝげかし
無始のけがれもそゝがれて
無垢の衣を身につけん

六根おのづと清らけく
神はとはに安らかに
聖旨の水に溶けぬれば
水に心はすみわたり
其の清けさは無きごとく
かぐはしきこと例なし
身の輕安はトロメンの
淨瑠璃摩尼の如くにて
見聞覺觸こと〳〵に
清き光に浴せずば
知らぬむかしはいかばかり
清き光に濯ぎなば
姿色いつしか麗はしく
八切德池にすみわたり
水や我かや我や水
照り徹りぬる泉には
深遠きはも覺ほへず
味はひ甘さかぎりなし
中につゝまる如くにて
八面玲瓏と輝けり
心を汚す世にあれば
いかでか（　　）
罪に汚れし身なりしぞ
雪の如くにきゆるべし

我らは日々に世の塵に
されば日に日に幾度か
胸のあくたを捨ておかば
心も腐敗（　）
赤き眼鏡もてみれば
清き光に磨かれて
眼にふれ耳に感るるもの
法眼淨き人は皆
清淨國土の莊嚴を
實は淨土遠からず
開きて見れば（　）
日光明く照せども

まみれてけがれし（　）
みむねの水に浴せかし
いやけがれてはつひにまた
清きいづみに洗ふべし
見るものすべて赤かりし
心識美化し此の土に居ながら
清淨國土に映ずなり
見聞覺觸悉く
（　）
清き光に法眼を
（　）
盲者は明を覺りえず

心の眼のなき人は
心法眼開きなば
如來不思議の力にて
七重寶樹の（　　）
百千種香のかぐはしさ
身はまだ此の土にありながら
神はとはに勝妙の
いかで淨土を知見せん
清き御國の莊嚴は
現はれにける（　　）
八功德池の浪の音
清冷の風身に觸れぬ
清き光にあふ人は
五塵の境にすみあそぶ

智慧光

如來智慧の光明は
佛智不思議の妙境を
日光遍く照せども
衆生無明の闇を破し
如實に啓示し給ふなり
盲者は見ること能はざ（り）

佛日常に輝くも
無明にさまよふ我々は
生れ來しとも行末も
愚の上に愚なり
斷常二見の深坑に
自ら智慧の眼なく
凡夫の畫と驗る處
聖者知見の眞境は
佛陀は如實に三界の
無明の永夜に眠りては
業識所觀の幻境を
還つて本有の眞界を

心眼なくば知見せじ
自ら智なく何れより
しらでも己れ知りがほに
正なき我が智にまどひては
陷ること憐れなり
聖境うたがふ愚かさよ
是聖人の夜にして
凡夫の爲には夜ぞかし
相性知見し給へり
生死の夢醒めやらで
眞實有と誤認せり
疑ふ心のあさましや

如來の眞實靈境を
現在驗めし我が世をば
たとへば夢に在ると見し
此の世はアラヤの力にて
如來の眞實妙境は
智慧の光の照す下
佛智と相應する時は
如來大圓鏡智にて
生滅所現の影像は
十界三千因緣の
因緣如幻の(　　)
凡夫の智慧は自然(　　)

知見したらば今自己の
夢幻と自覺せん
物は覺れば非ざりしに
生死の夢に外ならず
夢の醒めたる處なり
深く如實の觀に入り
佛境悉皆現前す
因緣所生の萬象に
夢幻影化の如くなり
一切依正色心は
一如の海の浪なれや
天象地異萬物(　　)

一切事物の理をさとり
二乘慧眼の眞智にて
天地萬物悉く
佛慧の眼開くれば
依正色心悉く
一切萬法悉く
本來不生不滅なり
一切生者の五蘊より
四諦十二因緣も
相好十力十八法
一如の水の浪にして
淨穢本來不二にして

一切萬法知見せば
眞如の幻化の影なれや
佛の靈境現前し
如來智力の所現なり
如來智力の所現にて
永劫活用窮みなし
六根十二處十八界
六度四攝四誓願
乃至一切種智までも
本來空有を離れにき
迷悟は常に一如なり

我が妄想の風止みて
本如の智光と相應し
智慧の光に闇消えて
本來如來心にして
佛智不思議の境界は
我等は闇き身なれども
智慧の光を見る時は
知見せられて悟るなり
證入したる妙境は
言語と思慮も絶えにける
如來の妙觀察智にて
聖旨を啓示して

分別識智の浪もなく
眞理知見せらるべし
觀じ來れば我が心
生佛一如の理をさとる
妄想分別離れにき
自己の識を空にして
如來不思議の境界も

自證知見の極みにて
自然自證の處なり
衆生の心に感應し
眞理を悟らしむ

神通三昧陀羅尼門
智慧光の用として
諸佛無上の正覺も
智慧光の德よりぞ

乃至不思議の佛法も
悉くこゝに通せしむ
一切種智悉く
顯はれ給ひし作用なり

歡喜光

如來歡喜のみ光は
斯のみ光に合ふ人は
佛法醍醐の味は
禪三昧に醉ふときは
斯のみ光を知らぬ身は
無常の火宅を栖かとし

天にも地にも充滿てり
無比の快樂を感ずべし
靈を養ふ糧にして
樂しさ極みなかりけり
有爲轉變の世を欣ひ
あだなる榮花を貪りぬ

世は幸福の器にあらず
心は常住のものならず
生死の海にさすらひて
はてしもしらで浮沈む
競爭はげしき生存に
紅顏何時か老いしぼみ
貴賤賢愚の隔なく
此の身は苦惱の器にて
愛に別離のなやみあり
やみにさまよふ人々は
煩惱苦提の因ならず
眞の幸福を欣ふ人

身は快樂の具ならんや
自然は己がまゝならず
八苦の波に漂され
此の身の末やいかならん
渡るに難き生の苦よ
强健とても賴まれじ
終に死王に奪はれん
心は憂怖の具なるかな
怨憎會苦の苦に
苦より苦にこそ入りぞ沒れ
憂苦涅槃の果ならんや
早くミオヤをたよれかし

佗受法樂のみひかりは
己が心の奥深み
いと暖かなるみ光に
春和の靈氣にもよふされ
櫻の花のいろ香にも
靈なる和氣は暖く
入我々入のかぐはしき
斯の妙感に入りぬれば
斯のみ光に合ふものは
神はとはに極樂の
ミオヤの聖種を種として
七覺心の花ひらき

永恒に輝き亙るなり
我を捧げておほ**ミオヤ**の
融合せんと欣ふべし
朝日ににほふ九重の
なほ比ぶべき我が心
靈の花の開くとき
彼此融合の快よさ
身も融液ばかりなり
身はまだ此の土にありながら
花の園生に逍遙す
信念またく養はば
我等が心に咲きにほふ

天つ乙女の奏でける
ミオヤを念ふ心には
肉の我
見聞覚知悉く
教主釋尊悦豫し
光顔麗はしく在ましゝは
肉に靈福感ずれば
我らミオヤをたよる身の
慈愛に充てる笑顔は
融合彼此の感應に
浮世の風は吹すさみ
暖愛のみむねに慰まれ

絲竹のしらべも自ら
とはに聞えて
靈き我となる時は
淨土の快樂を感ずべし
姿色清くましまして
ミオヤの恩寵に充たされて
自づと面に現はれむ
則をしめし給ふなり
靈樣に影見えむ
此の世の我とも覺ほへず
肌をさける苦の中に
なほ歡びの光あり

隘き病床の室にても
天よりひろき天ありて
戰敗れて淵に墜ち
心の底に耀々と
浮世の責は身に纏ひ
中にもひとりの大ミオヤの
我等も遂に向上ては
極樂無爲涅槃城
常樂我淨の園生にて
畢竟有無を離れたる
歡喜の光の（以下斷絶）

光を念ふ心には
翅舞ぬる觀想あり
望の網はたゝれても
輝く光は發見せん
情の枷鎖につながれし
慰む聲はひゞくなり
ミオヤのもとに至りなば
法性常樂の身となりて
眞善美妙の花にほひ
御國に歸して

不斷光

如來不斷の光明は
衆生の意志を攝め取り
まだ覺り得ぬ盲動は
風のまに〳〵漂ひて
內に煩惱潛在し
我らが弱き意志
自ら己れを制しかね
我等の意志は卑し
肉我の慾に驅られては
自ら人の目的を

道德秩序を照しては
至善の靈國に指導きぬ
生の目的定まらず
しらず三塗に向ふなり
外には魔風吹きすさみ
優柔不斷の念々は
墮落の淵に沈むなり
肉の幸福追ひ求め
名と利を貪り飽き足らず
覺らで三途に盲進す

主我の動機は日々に
自ら自我を覺醒し
なほまた己を卑むる
茫々として世に(　)り
肉の我の非を覺り
我等は至善ミオヤなる
如來は至善の主に在して
如來は我等を終局の
攝取のみむねを現はして
聖き光に
聖旨の光に聖められ
ミオヤの聖旨を意として

八億の念(　　)
自己の弱きを認めては
氣質の缺點自覺せよ
玄津何れに求めえむ
全く聖旨に投じては
如來によりて道をえむ
我を攝取したまふなり
至善の都に誘はん爲
不斷光を放ちます
自己の非惡を改めて
聖き我とは生れ更り
聖子の員には入りぬべし

不斷の光の指導にて
終局の目的定りて
如來は我等がみ親にて
如來の威神は儼かに
神聖正義の光にて
不斷正義の光にて
三業四儀の作す處
ミオヤの慈悲はいと深く
汚れし我を哀みて
深き慈愛に感じては
不斷の光に自から
不斷の意志に二面あり

眞善美妙の靈界に
念々歩々に向上なり
我らは如來のみ子ぞかし
我らが意に照臨し
道德律をたゞさしむ
勇氣は易く身に滿ちて
聖旨を顯はすつとめなり
罪に沒びし子らがため
聖き心を養ひて
おのづと樂しくすゝむなり
善より善にすゝむなり
願作佛と度生心

願作佛とは向上心
我法王の子として
德行を普賢に學んでは
聖旨を現はす力行にて
願度生とは向下心
同胞意志を發しては
人に對する同情を
拔苦與樂の慈悲を
志願を勢至と同うし
淨きみとに歸せざれば
不斷の光に返照し
不動の智劍に惡を切り

理想を文珠に倣ひては
一切の佛法求むなり
萬善萬行悉く
不斷の光によればなり
ミオヤのみむねを心とし
共に至善に誘導す
觀音菩薩に習ひては
普く衆生に施さん
衆生と共に大**ミオヤ**の
我いかにして作佛せん
己が非惡に對しては
三昧の索に非を縛り

聖意の光を意とし
八億四千の念々も
日は徒らに過ぎなまし
淨土に在りて百歳の
然らば如何なる苦難にも
他人の罵詈讒謗も
悦びいさみて
いかなる險阻荆棘も
自己が意志(　　)
人生肉の幸福を
聖きみ國にすゝみゆく
不斷のみむねを得る時は

三業四儀のなす處
皆佛行となりぬべし
此の土の一日の精進は
德を積むにも勝れりと
甘受安忍せらるべし
我を研く機會ぞと
一心勇猛精進べし
通り貫き果てぬれば
安意大道得らるべし
求むる爲にあらずして
階梯とこそきこゆなれ
いかなる娑婆の事業にて

敗になりても賴もしき
八風はげしき世の海の
不斷の燈光たつきとし

希望の光は類なし
迷ひ易き意志なれど
涅槃の岸に到るなり

安養界（無量壽經上卷）

我如來の靈國なる
いと清らけき法の身は
玉の宮居に住居して

聖寵に活ける聖衆等の
萬の功德具はりぬ
衣服飲食華香等

すべての莊嚴自から
こころに食を欲ほへば
金銀瑠璃寶珠
意の隨に至りては
色を見香を嗅ぎ食せりと
思食に持てる法の身は
妙味極なく覺ほえて
無爲泥洹の都なる
眞善微妙の華匂ひ
彼この聲聞菩薩衆
余方に準ひ人てふも
容色いとも妙にして

第六天の物の如と
寶の食器現はれぬ
明月摩尼の盂のごと
百味のうけは盈滿ぬ
以へば自づと飽かんとぞ
心は常に安らけく
味著の憂ふこともなし
常樂我淨の國土には
樂み極みなかりけん
智德圓かに具りて
實は薩婆若の一味なり
天と人とにあらざりし

自然に虚無の身をうけて　無極の體にいますなり
如來の靈なる糧をうけ　聖子らが法の身をたすけ
みおやの甘露のうけにより　靈の生命は支ふなり

無量壽經下之卷

厭へよ濁れる世、生活の難、富貴の苦

如來は眞理にましませば　聖旨に隨順する者は
自然法爾に泥洹に　到達すべきをいかなれば
心の闇に惑ふてぞ　眞に背き妄に依り
無始より己來さすらひて　自ら苦惱を迎ふるは
愚か世の人薄俗に　よしなき事を爭ひて
劇惡極苦の世のなかに　營み勤めて世を濟り

貧富貴賤おしなべて
財と金を貪ぼりて
生存競爭けはしきに
屏營愁苦いとまなく
心の爲に走使され
田宅あれば田宅に
其佗衣食資具の類
一たび己に得るときは
圖らざりしも非常なる
詐僞横領の難のため
憂愁胸を割ばかり
鬱憤胸に結ばれて

少長男女のわかちなく
有無とも憂等しけれ
互に肉を噬合ひて
煩悶胸に斷間なし
安き時だにあらざらん
奴婢六畜をはじめとし
憂のかゝらぬものやある
我有の執心深かるに
水火盜賊或はまた
焚漂劫奪被むれば
惱々解る時ぞなき
憂惱ながく捨てがたし

明暮神を煩はし
貯蓄は藏に積けるも
二の眼地に落て
たとひ死骸をよそほひて
神は迷途にさまよひて
いかに尊貴豪富とて
憂苦萬端は悉く
煩惱業の因あれば

貧賤の勞

貧窮下劣の輩は
田宅其佗衣食等
此も不足彼も缺て

寤寐に念を惱つゝ
爲に命はちゞめては
一すじの息とゞまれば
虛飾の葬儀は營むも
つき隨ふものなかりけり
斯る患は免れじ
我欲の動機によるなれば
未來の苦果は結ぶなれ

困乏常に身にせまり
衣服資具えまほしく
身心俱に勞すれど

なか〳〵我身につきがたく
膏をしぼりし勞力も
氷をたゝきて漁どるも
憂と惱に伴ひて
また寒熱と戰かひて
一生空しく口腹の
賭して天に死するまで
人と生れし甲斐もなく
未來に貯ふ功德とて
ましてや永遠に救はるる
自業の繩に縛されて

立居起臥安からず
半ば債主の犧牲なり
みな豪富に供すなれ
勤苦すること斯ばかり
今日とて安き時もなく
奴隷となりて命をも
追ひ役はれて果つるとは
人の人たる道もなし
微塵ばかりもなかりせば
道は夢だにしらざりし
またも三途に落るなれ

憂世の浪　憂愁報復

愛憎心に繋ぐれば
因果の車は休間なく
人の心の常なきは
世の人父子兄弟や
親屬意に適ふとき
たとへ金錢財寶も
そが爲ならば何物か
貌も言も和ぎて
頼みがたきは人心
今日の暴雨とかはりゆく
恚の炎がほのめきて
己れ憎しと枳の

怨親報復をひきむすぶ
めぐりて世間に現はるれ
愛憎違順定まらず
または夫婦中外の
互にしたしみ敬愛し
共に融通し合ふては
貪惜すべきと快よく
違戻することなかりしも
昨日の日和も忽ちに
一朝心に逆はば
胸に結ぼる恨の根
種を含めるたましひは

いつかは荆の木となりて
今世の恨はすこしだに
實に世の中の事どもは
即時に花果は結ばねど
萠發長成したる日に
怒を蓄へ毒を含み
自然に剋識時いたり
打ちつうたれて何れかに
　　闇の世に光を求めよ
此愛欲の世のさまは
去るも來るも獨にて
苦樂の處に趣きて

彼をさゝでや置べきと
後世に大怨となる
ここに結びし果しあれば
蒔置く種はいつかまた
必ず果を結ぶごと
憤を精神に結びたる
當に互に對生し
必ず報復す時は來む

獨り生れて獨り死し
人々自業自得なる
代るものとてなかりけり

さま〳〵かはる人心
されば果報も區々に
何れも昔し豫備せしを
遠く他所に生れなば
善惡自然に其行を
窈〳〵冥々わけがたく
六道路を異にせば
やよ人よしなき樂を捨て
勤めて善を修めつゝ
永遠の生命に常住の
いかにて道を求めざる
此身のはてはいかならん

今善き人も惡となる
禍福位置を異にする
時得て結ぶ果にぞある
いかでか再び見合ふべき
追て受にし身にあれば
別れゆく衞は何處にか
また會ふ期はなかるらん
强健有力の時にこそ
勇で救を求むべし
平和に入べき道をえよ
何の樂をかまつべきぞ
能く自ら顧みよ

闇の源

寔に淺まし世の人は
業力保存の自然にて
恵施の福田植おかば
光の道にすゝみなば
善惡業道あけきをも
己れしらずも因果律
日々目前に見ることは
あはれ凡夫の愚かさは
因果の道理も辨へず
さとるよしなくいたづらに
外にしるべきこともなく

善惡因果の理にくらく
死すれば更に生をうく
必ず好果は得べかりし
必ず光に達するも
みな然らずとおもひてぞ
自から受るしるしには
誰が蒔き置し因よりぞ
先々祖父も理にくらく
ましてや救の道などは
肉の生活わたるより
實に淺ましき世の人や

されば家庭の素養とて
家憲家則の教令も
心靈永遠に救はるる
轉展相續重ねては
惑の繩につながれて
善をもなさず道德も
神闇く意閉ぢ
道の歸趣する處をば
諭すものとて無りせば
看よ時々に襲ひ來し
何れの原因より來りしと
自作自受の理にくらく

眞理にくらき闇のうち
形肉を嗣ぐ事のほか
法のことには及さず
祖先の源よりつなぎ來し
子々孫々も悉く
知らず累代襲ひしは
死生の趣善惡の
自ら覺り能はねば
あはれといふも愚かなり
吉凶禍福襲ひしは
怪まざるこそ怪しけれ
天を恨み地をとがめ

方角または星宿に
まことに愚のきはみなれ
有爲遷流の世にありて
生死の常の道として
壽命長 短 中天の
有爲の常規を覺らねば
また子にして父を哭し
互に哭泣し合ふこと
更に道にはあらざれば
生死の眞理を明らめば
無常遷流の常規にて
本より定まり有ものを

受く災禍とおもふこと

分段生死をうけし身は
展轉相續嗣立す
不定は有爲の常なれど
或は父が子を哭し
兄弟夫婦親みの
いかに哭泣するとて
さればぞはやく道を聞き
痴哀の悲慟はなきものを
生者必滅會者定離
さりとは思はで我ばかり

獨り憂目にあふものと
みな是顚倒の本にして
眞理の自然を敎ふれど
なべてまよひの深きより
斯の如きの輩は
眞理の敎を信解せず
遠きを慮る理にくらく
愛と欲とに惑ひては
己が意に順はずば
財と色とを貪ぼりて
明き道にたよらねば
生死窮りなかるべし

自からかこち他をうらむ
無常の根とはいふべけれ
まことに解するものはなく
生死流轉のきはみなし
矇冥抵突
たゞ目前に眩みては
生死の快樂追求め
眞理の道に達り得ず
瞋怒のほのほに目はくらみ
明暮神を煩はし
更に惡趣の苦を受る
いかに哀につたなけれ

痴愛の悶

或は無常の夕あらし
親子兄弟妹と背の
遺りしかたの悲しみは
朽はてずして獨りのみ
恩愛腸を斷つばかり
哭泣天に訴ふも
悲嘆をわかつみちもなく
幾日經れども顧戀して
道の諭を被むれど
ながらく心は開けえず
たゞ恩好を思ひては

家庭の花を吹ちらす
わりなき中をも獨り死し
など諸共に苔の下
愛を見る目のいたはしさ
慕ふ思はむすぼれて
悲慟地に伏しなげくとも
悼傷遺る瀬もあらばこそ
歳は卒れど解がたく
固く結びし痴哀には
哀情解くべきすべもなし

實にぬば玉の闇心
くらき惑に覆はれて
端正しき己にかへりてぞ
世事を決斷なしがたし
壽命は終につくれども
またいかんとも爲し難し
猥りがはしきたはむれに
またも得がたき人生を
動物欲のみ貪りて
悟るはまことに寡けれ
げにあだし世は常ならず
尊き卑きおしなべて

迷の矇に閉られて
自から思ひ計りては
專精に道を行ひて
たゞいたづらに日を送り
道を得ること能はずに
斯る痴愛の輩は
みにくさ言むかたもなし
眞面目に生活こともなく
道に惑へる者多く

賴むべきものなかりけり
賢愚上下のへだてなく

生存競爭に目もくらみ
我欲の動機にかられては
天に逆らひ理に戻り
良心已に痲痺しては
慚愧の心もなかりけり
罪の極り待つのみぞ
己に惡道に墮落して
忽ち魂奪はれて
長く苦患を受ぬれば
ほとけ彌勒に告給ふ
まことに愚か世の人の
熟つら思ひはかりては

各殺毒を懷きては
妄に事を興さんと
また人道にも從はず
非惡と自らゆるしても
恣まゝに所爲をなし
生ながらその精神は
未だ壽も盡ざるに
獄火の中に沒入る
出づる期だにあらざらん
我今汝に語てし
かゝればつひに道を得じ
すべての惡は遠ざかり

善きこと擇みてつとめかし
しばしのほどに消はつる
佛の在す世に於て
至心に淨土を願ふ者
功德殊勝なるを得よ
眞理のおきてにそむき
人後におつることなかれ
前には至りて愚なり
若しも疑雲に覆はれて
具さに佛に問よりて
みろくぼさつは長跪して
佛はみいづいと巍く

愛欲榮花春の夢
まことに樂しきことやある
當につとめはげむべし
智慧明達に
心をほしきまゝにして
まことの道にいそしみて
世の智慧はみほとけの
其智によりて道を見て
まことの法を解せざれば
まことに〳〵說明さん
佛に白して言しける
說き給ふこと快し

いまはみ教聽きまつり
實にのたまへるごとくにて
みおやのじひのふかきにて
闇夜に燈火えたるごと
長く度脫を被りて
斯もたふときみ教に
上は諸天人民より
救の慈悲を蒙りて
佛語の教誡いとふかく
智慧の日月照しては
大小あらゆる事として
今我すべての人々と

つら〳〵おもふに世の人は
今みほとけは子をおもふ
明き大道示します
明きみちをえ
まよふべくも思ほへず
歡ばざるものなかりけり
下はいきとしいけるもの
迷の憂苦を解脫せん
げに清らかに潔よし
横に十方竪に三世
照し給はぬこともなし
度脫を蒙ること得るは

みなみほとけがむかし世に
身をへりくだし苦を忍び
恩德普く被らしめ
智慧光明さやけくも
涅槃の門を開きては
眞理の敎は保たるゝ
威儀に制裁備りて
三業圓かに備はりて
佛は法の主にまして
普く人天の師と仰ぎ
機類にしたがふ望には
今は佛にあひ奉り

道を求むる爲ならば
功をつもりし結果なり
福德たかしいや巍し
照さぬくまもなかりけり
すべての生をみちびきぬ
人の眞知を開かしめ
道德自然と化せる
十方感動極みなく
尊さ衆聖に超え給ふ

かなへる道を得せしめぬ
みだの光名を聞まつり

歡喜たとふるものもなく
心開明えたりにき

佛みろくに告給はく
汝が言ふこと實に然り

佛を欽敬する者は
實に幸福といふべけれ

天下久く久しくて
乃ち佛出にけり

今我此土に出で
佛の法を說のべて

道教宣布することは
すべての疑惑を除きては

迷の本を拔かしめて
衆惡の源を塞ぐため

佛は本より自在にて
三界遊步さはりなし

眞理を攬る智慧は
萬法をさとる至要なり

若し大綱を執れば
すべての事理は明らむれ

五道の闇を照しては
救の光を與へたり

未だ度せざる者を度し
生死と涅槃の道を分け

生死のちまたを出離して
彌勒よ汝多劫より
衆生を度せんと願を立て
汝につきて道を得て
爾と及び十方の
永劫已來流轉して
憂惱怖畏いくばくぞ
乃至今世に至るまで
今は佛に相遇うて
殊にかしこき阿彌陀佛の
いかばかりかは嬉しきぞ
汝自ら覺りては

涅槃の都に導きぬ
菩薩の行を修めては
已に久しき劫を經ぬ
涅槃に入るもの數多し
諸天人民ことゞ〳〵く
五道悉く經めぐりて
具に言こと難からむ
生死のきづな斷がたく
法の教を聽受して
眞理を聞こと得たりしに
吾も同情に勝へぬなり
生死老病の苦を厭ひ

此身は惡露不淨にて
宜しく自ら決斷し
ます〳〵善に向上し
心の垢を洗浴し
表と裏と相應し
轉々互に策勵し
至誠精明に求願して
一世の勤苦は須臾のほど
快樂極ることもなし
生死の苦根を拔出でて
命は千劫恒沙劫
彼は無爲の涅槃城

是快樂の器にあらず
身と　行　を端正し
已を修め體を淨め
言と行とを忠信に
人能く自から度するなれ
共に救ひ救はれむ
多く善本をつもりなば
後に淨土に生れなば
長く道德と合明し
三毒苦惱の患なし
自在に意のまゝにして
自在自然の處なり

汝ら宜しく精進し
疑惑をいだきて中ばにて
疑ひ邊地に墮しぬれば
みろく佛に白しまつる
專精におさめ學びては
必ず往生することと

廢惡進善

佛みろくに告給ふ
心を端し意を正し
甚だ至德と名づくべし
いかにとなれば諸佛土は
自然に善にかなひては

心の所願を求むべし
悔て過ることなかれ
五百歳中厄をうく
世尊の御さとし被むりて
教のごとくに奉行して
敢て疑ふことあらじ

汝らよくこの世に於て
すべての惡を作さざるは
十方世界に比なし
人天の類　悉く
大に惡を作さざれば

開化すべきにいと易し
五惡五燒五痛なる
この群生をさとしては
五痛と五燒を捨離せしむ
五善を持して　幸の
またなき道を獲せしむる
何が五惡を消化して
即ち世尊告げ給ふ
及びいきとし活るもの
我愛我欲より起る
すべての惡を爲さんとす

今我此土に作佛して
中にて教化なし難し
五の惡を除かしめ
進で其意を降化して
度世長壽泥洹の
何か五惡五痛五燒なる
五善と度世を獲しむるぞ
其一惡とは諸天人
生理の自然に驅られては
動機は自然惡にして
みな然らざるものはなし

生存競爭はげしくて
轉た互に剋賊し
迭に相呑噬し
惡逆無道の報いには
業道自然にめぐり來て
犯せる者は赦されず
貧窮下賤乞匄や
または愚痴と弊惡と
或は尊貴豪富にて
皆是宿世に爲す業の
愚や世にも王法の
惡を作りて罪に入り

弱者は强者の肉となり
殘害殺戮きはめては
善を作すを知らざりき
後に殃罰免れず
神明たしかに記識して
看よ世の中にさま〳〵の
孤獨聾盲はた痳痺
狂狂不具の屬あり
高才明達なるもあり
報ひ來りし結果なれ
牢獄あれども畏慎せず
其刑罰を受る日に

解脱を要求せんとても
自然の一分の此世にも
ましてや自然の本にして
壽終りて後の世に
其幽冥に入りてより
王法刑罰あるごとく
身をかへ形を改めて
壽命は業に隨ひて
魂神自ら趣きて
害し害され　共生して
殃惡未た盡きざれば
天地自然の趣りは

いかでか免れ出づべきぞ
目前に見ることなるに
因果應報なからんや
尤も深く尚劇し
生を轉じて身を受ん
自然三塗の苦惱あり
六道々を易へてより
或は長き短きと
自ら作りて自受く
報復已むことなかるべし
出づる期とてはあらざらむ
即時に　暴　に至りしも

善惡の道定まりて
之を一大惡にして
苦を受ること斯ばかり
人能く斯る中にして
身と行を端正くし
衆〳〵の惡を爲さざれば
度世洹泥の道を得ん

二

其二惡とは人民が
都て義務の心もなく
淫逸奢侈はしきまゝ
至誠の心なかりせば
會らず當に歸すべけれ
一痛一燒とは名づく
譬ば大火の身を燒くに
一心己を制しては
獨りすべての善を作し
身獨り度脫して
是を一大善と爲す

父子兄弟夫婦は
法度禮儀に順はず
己が快樂のみ求め
互に欺惑し合ふならん

心と言と異にして
佞諂不忠にて
賢を嫉み善を謗り
主上明ならずして
臣下利慾たくましく
實賤躬行範を成し
位に於て正なくば
妄りに忠良を損しては
臣下は君を欺きて
兄弟夫婦知己等
各胸に三毒を
只己のみ厚うして

言と念とに實はなく
言を巧みに諛媚ひて
怨柱に陷し入る
臣下を任用するときは
機僞こと多端なり
其形勢にこそ信伏す
自ら欺き他を欺き
天の心に應はざれ
子はまた父を欺きぬ
互に欺誑し合ふては
懐きて他人を排斥し
多く有らんことねがふ

尊卑上下おしなべて
家を破り身を亡し
親屬知己に至るまで
或は家室の知己
みだりに事を起しては
互に怨りつ怨られつ
富有なれども慳惜し
寶を愛し名を求め
かくしてつひに竟りても
獨り生れて獨り死し
唯善惡禍福のみ
或は樂處に生をうけ
心は俱にみな然り
前後をだにも顧みず
害を被らぬものもなし
鄉黨野人など
互に害をなさんとす
怨み怨まれあだをなす
常に情を施さず
心を勞し身をいため
恃べきかた更になし
一りも隨ふ者はなし
命を追うて生るなれ
または苦毒の中に入り

後にいかほど悔るとも
大かた世間の人民は
善を見ては憎謗し
但惡のみを爲さんとて
常に盜心懷きては
無益の事に費して
邪心内に正からざれば
豫て覺悟なき時は
今世に現に王法の
罪に隨ひ拘引れては
曾て宿世にありしとき
身に善本を修めず

何ぞ及ぶべきものぞ
心愚かに智かげて
慕ひ及ぶなど思はず
妄に非法のみを作し
他人の利益を羨望す
權謀求索を事とはす
人の色あること怖れ
事至つて悔いぬべし
牢獄ありて犯したる
其刑罰を受くるなり
道德を信ずるなく
今また罪惡犯しては

天神これを剋識し
壽終りて神逝き
故に自然の三塗なる
一たび中に入りぬれば
いつとて解る時もなく
是を二大惡にして
勤苦することかくばかり
人能く中にて一心に
獨り諸の善を爲し

三

其三惡とは世の人が
共に天地の間に在り
其名籍を別ちなば
惡道の中に下入る
無量苦惱受くるなり
世々累劫に出でがたし
痛は言にのべられじ
二痛二燒とは名くなり
譬ば大火身を燒くに
意を制し身を端し
すべての惡を爲す勿れ
因緣相ひ因り寄生して
年命幾干なるもなし

上に賢明長者あり
下に下賤貧窮や
中に不善の人ありて
但姪迭を念ほひて
愛欲の火に燒れては
嬌色を眄睞して
貞婦を空房に泣しめて
爲に家財を費損して
交々聚會を結びては
攻めおびやかし殺戮し
家を齊ふ意なく
詐僞竊盜して得る時は

尊貴富豪なるもあり
庶劣愚夫の輩あり
常に邪惡を懷いては
煩ひ胸に滿みてり
寤寐に心安からず
放蕩縱逸憚らず
私妄に入出ししまりなく
事非法を爲さんとし
いくさを起し相伐ちて
强奪不道限りなし
自ら活業修めえず
忽ち遊樓に蕩盡す

威嚇脅迫等により
恣がまゝに快意して
或は親屬知己にまで
親屬尊卑もはゞからず
親類緣者も悉く
斯る痴猥の輩は
是の惡人鬼に著はれて
神明記識し給へば
無量の苦惱ともないて
出る刹さへもあらざれば
是ぞ三の大惡にて
譬ば大火に人身の

己が妻子を歸給する
身の逸樂を貪りぬ
尊卑のわかるゝ心なく
道ならぬ事爲す故に
患ひ惱まぬ者もなし
王法の禁を畏れざる
日月照見し給ひて
しからば自然に三塗あり
中に展轉累劫に
いかで解脫を得べけんや
三痛三燒と名づくなり
燒かるごとくに苦しけれ

人よく一心意を制し
獨り諸善を作りては
福德度世泥洹の
端身正行なすときは
すべての惡を作さざれば
道をえ三大善となす

四

其四惡とは人民が
轉相習ひ感染して
弊風卑俗に染まりては
互に讒謗し合ひ
或は綺語して憚からず
善人をば憎嫉し
父母には孝せず
朋友に信もなく
善を修めん思なく
衆の惡に習ふなり
自然と惡に化するなれ
惡口兩舌妄語等
讒謗または鬪亂し
賢明者をば敗壞す
師長を輕慢し
至誠眞實更になし

自ら尊貴自大して
横に威勢をふるまひて
自己返照の知なければ
自から强健なればとて
天地神明日月に
肯へて作善の意なく
自から用つて偃僂して
冥慮恐るゝ所なく
是の如きの衆惡は
前世に於て積み置きし
小善扶掖し來りては
今世に爲せる惡により

己道ありと謂へり
世の人をば侵易し
惡を作せども恥もなく
人の敬まひのみ欲み
畏れ憚るいろもなく
降化すべきこと難し
當に斯あるものと謂ふ
常に憍慢をいだくなり
天神記識し給へば
福德之に報いて
營護の助によるなれど
福德つひに滅盡す

諸善神も離るれば
今此壽命終りなば
自然にせまり近きて
其名籍は神明が
殃罰に牽引れて趣かん
積りし罪の薪火にて
身心ともに碎かれて
已に斯時に當りては
天道自然の律をば
斯れば自然に三塗には
中にて展轉累劫に

冥に依賴すべきなし
衆の惡の歸す處
惡道に趣き到るべし
記しおきあれば誤たず
罪報自然に捨てがたし
火鑊は沸してさしかまふ
精神痛苦極みなし
悔とも何ぞ及ぶべき
蹉跌すべき理なし
量りもしれぬ苦惱あり
出る期もなく苦めり

光明大師の讃

歸命頂禮阿彌陀尊
善導大師と身を化して
大師應化の生緣は
明勝法師の門に入り
或時淨土の變相を
質を蓮花に託しては
其年二十に滿ぬれば
同伴戒師と觀經を
眞の佛道の要律は
今我是に遇ふことは

方便不思議の力より
大悲の弘願を現はせり
希有にて測りがたかりし
法華維摩の經を誦み
瞻みて深く歎くらく
神を淨土に栖まさなむ
進みて具足の戒をうけ
讀してよろこび身に徹し
唯此法に如くはなし
渡に船を得たりしと

如來の教門多けれど
大藏經を手に任せ
誦習し如說に行じては
盧山に遠師の躅を見て
四方の名德訪ねては
其內微にして理深きは
是より萬緣放下して
跡を悟眞に遯れては
三昧成就の兆には
已に業事成ずれば
西河にいます綽公の
秋風落葉吹散し

機に應はずば成り難し
探るに觀經を得たりしに
勇猛に精修し給へり
豁然と意を彌增しぬ
出離の要路求めしに
念佛三昧に如くはなし
畢命爲期にはげみけり
一向專修功を積み
寶閣瑤池現前す
宜しく有緣を益せんと
業を慕ふて行く途に
深き坑にぞみちぬれば

瓶鉢提げて坑に入り
時に空中聲ありて
警告を被むり道綽の
欽しみ夙志を白しければ
大師三昧の深詣を
我往生の得と不を
道俗競ひて度を求む
蓮を採りて行道し
長安城の產水の
示に依りて化を傳ふ
法輪轉た熾かんにて
慈悲熱鹹の溢れては

念佛三昧に日を累ぬ
疾く此處をさりゆけと
御許に參りて禮謁し
觀無量壽を授けらる
綽公も尙歎服し
却つて師よりたづねらる
往生決疑の兆には
花萎まずば往生す
聲に念佛を弘めよと
機感や時を得たりけん
長安城に充にけり
四部の弟子等を激發す

貴賤賢愚の分ちなく
金剛法師と念佛の
佛像光を放ちては
慧謙慧感の英傑も
觀經の疏義の經文の
種々の靈感被りて
入りて自行を勵みては
出でて淨土の法を說き
三十餘年寢處なく
持律堅固にたもちては
目をあげ女人を見給はず
好食を得れば衆に供し
敎化普く被むりぬ
勝劣校ぶる議論には
念佛の功德を證明す
服して念佛の門に入る
玄義の發明祈りしに
古今を楷定し給へり
寒冷に尙汗を爲し
道俗齊しく度し給ふ
袈裟を脫ことあらざりき
塵ばかりだも違はざり
名利に念を動かさず
己は麁食に身を支ふ

常に自から分衛して
凡そ信施を受ぬれば
淨土の變相畫ては
京幾の道俗化になびき
誦經念佛三昧の
或時人にのたまふに
我今西に還らんと
佛と及び二ぼさつよ
正念たがはで彌陀法の
樹上に端坐(化)して
時に京師の士大夫は
高宗帝は德を嘉し

牟尼の行儀にしたがへり
彌陀經寫して世にひろめ
散施し都鄙に弘がりぬ
身を捨て往生を欣ふ者
發得せし者數知れず
此身は苦惱厭ふべし
寺前の高柳に登りては
神力我をたすけよと
中に不退を得せしめよ
投身自絶し給へり
至誠に骨を葬りぬ
寺額を光明と賜はりぬ

佛法東漸より已來
大唐彌陀の化身ぞと

大みおや

如來は衆生の慈父なり
天地萬を統べたまふ
清淨界に在しては
迷の衆生に應ひては
天地萬の備もて
我らが心を救靈てぞ
彌陀の慈悲いと深く
超世本願を示さんと

盛德ためしなかりけり
傳へて稱讃止まざりき

三身一如に在して
偏一切る法身と
光明攝化ふ報身と
教を垂れます應身なり
衆生を育む目的は
竟に佛に成す爲めと
苦毒に沈む子らがため
光明名號を顯はしぬ

光明遍く照しては
　光に三垢も清められ
平和と歡喜に充されて
　此に居ながら極樂の
彌々命の終には
　金銀マニ眞珠
父子相迎の朝には
　無上菩提の昏には

十　界

法身如來より分れ出し
　六凡四聖十界の
念佛衆生を攝めます
　身をも心も安らけく
靈き心と生ぬれば
　聖衆の員に數へらる
眞實報土に生るなれ
　瑠璃寶石の寶樓に
菩薩の功德具はりて
　十方度生こと極なけむ
衆生の心に悉く
　性能具さに備れり

心一つの爲す業の
　淨穢苦樂の果報び
激苦間なき地獄は
　飢と渴きの餓鬼てふは
互に噉み合ふ畜類は
　鬪諍競合ふ修羅道は
人道を正しく行ふは
　博く愛して最高き
善惡ともに三等わけ
　無明の闇に彷徨る
四諦を悟る聲聞は
　無明生死の夢醒めて

善惡迷悟の因緣により
　十界の依正と現はるれ
極惡邪見の報ひとや
　肉欲我欲罪による
愚痴横惡なる業に
　驕慢り勝負を好むにぞ
人倫資格たる人ぞかし
　行ひなるは天つ人
苦樂を受る六の道
　流轉生死の凡夫なり
神通自在の身を證し
　涅槃を得るは辟支佛

智慧と慈悲とが備りて
　因圓果滿究竟て
二乘の解脫は權にして
　本覺眞如に歸りては

二利兼行は菩薩にて
　無上覺位は佛陀なり
佛陀の涅槃のみ眞理
　始本不二の身とならむ

のりのいと

あみだほとけの法のいと　心の玉につらぬきて
みなもろともにのちの世は　同じはちすの身とならば

この露の身はこゝかしこ　しばしがほどは別るとも
心はずずの緒を通ほし　同じさとりの身とならん
のちこの經をよむひとは　おもひ出すらむ花の上に
なかばをちぎりしこの友を　ふかきまことの友として
清き御法のいとぐちを　心にとほせ親も子も
また兄弟も友だちも　この一すぢの法の絲
ともに心に貫きて　同じく無爲の身とならば
親子夫婦も兄弟も　六親眷屬友だちも
一の法の絲とほし　同じく無爲の身とならむ

育兒の歌

一

仰ぐも畏こきみ親より
預かりにける稚兒なれば
み旨の兒等になれかしと
たゞ旦夕にいのるなり

二

神聖正義のミオヤより
あづかりにけるこの稚兒を
もしもみむねに背かせば
われこそ地獄の薪なれ

光明

清浄光

五つの塵にまびれにし　我らが心のしぶごろも
清き光のみそゝぎに　きよめられてぞいさぎよし

歡喜光

ミオヤをおもひてよろこびの　光のなかにすみぬれば
こゝろはのどけき春の日の　園にあそぶにたぐひけむ

不断光

すゝめよすゝめ御佛の　またなきくらゐの道とほし
斷えぬ光をたよりとし　いやいさましくすゝめかし

入山學道

無明闇痴の雲はれて
舍那圓滿の月の顏
一度び肉の我となりし
慕ふ心は深けれど
是だに稱はぬ世なりせば
狹き心にあらなくも
堅き心の一筋は
金剛不壞の意思をもて
娑婆即常寂土
妙なる姿妙にして

本覺眞如の空淸き
見まくほしさに戀すなれ
罪の衣を被し身には
逢坂の關越え難く
活き存ふべき甲斐やある
深き思ひに沈みける
嚴も徹すと聞くからは
恩愛繫縛の綱を斷ち
舍那淸淨の法の身は
現在說法と聞きつれど

肉の心につゝまれし
此土と彼土とは一重なる
されど濁りの世になべて
しづけき山に入りてこそ

無明の雲に覆はるゝ
無明の雲ぞ隔つなれ
塵の巷を立ちいでゝ
靈き國は開き見む

聖者の表情

無量壽經序文の意。是淨土教の秘鑰

清淨法界常住の
威神の光明永しへに
無明に迷ふ子等がため
釋迦牟尼佛と世に出て
譬ば西に日は入るも

阿彌陀如來の日輪の
十方法界照しては
方便不思議の力より
慈悲の聖旨を示します
光は月に映ず如と

彌陀常住の日光は
佛陀出世の本懐を
即ち世尊寂靜に
淨界彌陀の靈光は
爾時諸根悅豫し
光顏いよゝ巍々として
恰も明淨なる鏡
如來淸淨光明は
諸根はいとも淸らけく
如來歡喜の光明は
一切諸佛の所住なる
如來智慧の光明は

牟尼滿月に照すなり
靈鷲の嘉會に現しぬ
彌陀三昧に入りぬれば
人佛牟尼の身に現じ
姿色も殊に淸らけく
威容の光顯なり
影が表裏に暢る如と
世尊の威覺に映現し
微妙奇特にいましける
世雄の聖情に融合し
大我の中に安住す
世眼の智慧とあらはれて

衆生の無明を照しては
如來不斷の光明は
最高德の範として
如來萬德圓かにて
三輪完全の鑑もて
人佛牟尼は一心に
本佛彌陀の聖德は
入我々入の神秘には
甚深不思議の感應は

如實の知見を示しぬる
世英の聖意に動きては
最勝道に導きぬ
天尊の身に現して
衆生に軌を垂れ給ふ
本佛彌陀を憶念し
牟尼の聖意に映現す
彼此の三業冥合し
即ち斯教の奥旨なり

諸根悅豫讃

彌陀の慈愛は永しへに　天と地とに充滿てり
三まやの床に融合うて　悅豫極み無りけり
慈愛に滿つる彌陀の面　朝日まばゆく輝ける
靈き姿を想ほへば　悅豫極みなかりけり
念佛三摩耶に心すみ　慈悲の聖旨に融合ふて
神秘不思議の靈感は　悅豫極み無りけり
我み佛の慈悲の面　朝日のかげに映ろひて
照るみ姿を想ほへば　靈感極まりなかりけり
春の氣にあふ櫻花　物こそ云はね樂しさは
色と香りに現るは　彌陀に觸れたる心かな

姿色清淨讃

譬へば西に日は入るも　光は月に映るごと
無量壽王の日光は　牟尼滿月に輝けり
まばゆく照す朝日かげ　金剛石に映るごと
彌陀光王のみ光は　牟尼の姿に輝けり
譬へば明淨なる鏡　影は表裏に暢るごと
彌陀の光に映へる　牟尼の姿の清らけし
無量光の朝日かげ　三まやの窓を照します
牟尼の金のみ姿に　色映ろひて清らけし
彌陀の光に映ろへる　牟尼の姿は清らけく
金の色は妙にして　世にまた比ひ無かりけり

光顔巍々讃

萬の山に立ちこえて　須彌るの峰は聳へけり
彌陀の朝日に映ろへる　牟尼の威神は巍たかし
日月摩尼の光さへ　隱れて墨の如くなる
彌陀の威神の極なきは　牟尼の光顔に現はるれ
彌陀の神聖なる聖旨　牟尼の光顔に現はれて
威神の光明極みなく　三千界を震動す
天つ魔羅の吹き起す　百の雷群雲も
み天さやかに照します　月には障りあらざりし
宇宙に獨り尊かりし　彌陀の威神の極なきは
人佛牟尼と現はれて　光顔けだかく輝けり

むつみの正因

聖き我等が教主　過去道意を發す時
花を分けける乙女子と　いもせのちぎり誓ひにき
せこが立てたる志氣高く　妹が心の花清く
むつみてよきみを結ぶまで　誓ひて仕へまつらるゝ
上なきさとりを得るまでは　世々にたがはでむつみける
教の祖の蹟たかし　むつみの法のかしこけれ
聖なるみむねをせこはうけ　白くはいもをいざなひて
きよきむつみを結びては　みおやにつかへまつるなり
上なきめぐみをいもはうけ　赤き心をせにさゝげ
高き天職を助けては　聖恵に報いまつるなり

正婚の頌

聖なる御名を稱へては　聖旨の現はれ仰ぐなり
如來の神聖なるみむね　尊く婚をなさしめよ
如來の上なき恩寵にて　和ぎ婚を結びませ
如來の正義なるみむね　正しく婚を成さしめよ
至眞にしていときよき　靈國をこゝに格れかし
至善にしていときよき　靈國をこゝに格れかし
至美にしていときよき　靈國をこゝに格れかし
如來の聖きみむねもて　圓かに婚を結びませ

聖き皇統

朝日かゞやく日の本の
紹かせ玉へる一系の
畏き代々は民草を
聖なる世々は三寶を
中にも聖武の帝より
三十八主の天皇には
また歴代に亘りては
身を法體に改めて
凡そ世界は廣くして
吾皇の代々ばかり
天津日嗣を萬代に
代々の天皇尊とし
子として愛撫し玉へり
法とし歸依し玉ひける
靈元帝に至るまで
落髪受戒し給へり
三百に餘れる王子等が
正法を護持し玉へり
國てふ國は多けれど
めでたき世々は又あらじ

おみなの模

いとも畏こき皇の
國つ萬の民草に
ひとり古今に英でにし
光明后の聖德は
聖武の帝を助けては
悲田施藥の院を立て
大佛殿を始とし
深くも佛法興隆に
自ら誓ひて千人の
清き心の兆しとて

代々の國母の慈悲の露
かゝらぬ里こそなかりけれ
慈悲の權化と崇めらる
末の世までも照すなり
公私の二德を布まして
天下の無怙を愍れみぬ
佛堂伽藍を建立し
力を竭し玉ひけり
病者を洗ふ浴室に
阿閦如來を感見す

后は一時清水に
宛然活ける觀音の
貴き賤きをしなべて
恁あれかしと賢くも

禮拜の範

あふぎぬかづく大宰府の
道實公は母ぎみの
汝が五のとしのをり
危きいのちを觀音の
御恩のほどな忘れそと
終身むねにをさめては

自ら玉姿を寫せしに
慈悲の姿と現れぬ
佛を信ずる女らは
範を垂させ玉ふなり

神とまつらる菅原の
いまはのときの示しなる
重き病にをかされて
大悲の力に救はれし
こゝろこもれる遺言を
つねに恭敬したまへり

三世諸佛を拜禮し
または聖經寫すなど
斯も信仰深かりし
たうとき神とあがめては

五百の僧に供養なし
種々の功德をつもりけり
みたまにませば今もなほ
伏し拜むなり諸ひとが

不死の忠魂

あゝ忠臣と後の世に
今尙つきぬ橘の
信仰ふかき母ぎみが
拜むと夢見てやどりしに
朝臣は三德兼備へ
君に献げし命をば

譽を流す湊川
正成朝臣の生たちは
志貴の山なる多門天
多門丸とは名つけらる
忠誠古今に比なし
湊川原に消ぬれど

一度死して七度は
衛り奉らむ忠魂は
君に倣ひてわれ〳〵は
至誠の魂とこしへに

生れかわりて王門を
いまにも活るいくさがみ
たとひ此身は盡るとも
死なぬつとめを勵まなん

念佛將軍

三百餘年太平の
家康公は若き時
討死ときゝおのれをも
大樹精舍に入ぬれば
諫と敎へに隨ひて
此より運を開きけり

基を開く德川の
主と賴みし義元が
自害せむとて香花院
山主の登譽上人の
自殺をとゞめ幡をあげ
其上人の示には

天下に四民とわかるれど
大みおやより命なる
おもふて爲ば耕も
大刀鐵砲のつとめをも
斯も安心さだむれば
忘れぬ爲に日び〳〵に
教を蒙りこゝろをも
激しく戰ふをりからも
天地萬もこと〴〵く
佛まかせのまこゝろは
信仰ふかき公が身は
戰場度々の危難をも

職分は私欲の爲ならず
國の爲なり世の爲と
耘る業も菩薩行
皆是佛道修行なり
佛の慈悲と御恩をば
六萬稱を唱へよと
生れかわりて是よりは
念佛怠ることぞなし
佛の力と信ずれば
必ず成功なすものと
劍や玉にも侵されず
のがれて國を治めしは

佛の力と量りなき
山をきりぬく六字とは
壽はみだのちかひにて
なると自信を表はしぬ

感謝の歌

天は何ともいはねども
春は芽生て夏しげり
大親のおきては意なき
まして心の有る身より
萬ノ物をいつくしみ
神聖正義をしめします
恩寵を御名に表はせり
救ひの御手に攝められ

四時は常を過まらず
秋は實りて冬收さむ
草木も守りて違はじを
仰げば彌よ尊としな
心を照らす靈光は
罪にほろびし我等には
稱へて聖意を信賴なば
光の裡に潔ぎよく

常恒に閑けき心地して
もはや此身は終りなき
悦び勇みて日々に日に
常に感謝の心もて

安くぞ此世を暮さるゝ
壽の中の生命ぞと
聖きみむねを畏こみて
命せの職をはげまなん

大經讃佛偈

如來の光顏うづたかく
日月摩尼の光さへ
如來の容顏世に超えて

威神の德は極みなく
隱れて墨の如くなり
外に比ぶるものもなし

正覺の音高くして
正義と多聞と精進と
威德比ぶるものもなく
深く諸佛の法界を
悟の海の底ひなく
無明と慾と怒とは
人天の中たぐひなく
無量の功德備りて
光明の威相おごそかに

十方界にひゞきける
禪定三昧智慧ふかく
殊に勝れて不思議なり
照さぬくまもなかりけり
極なきみそら盡します
世界に絶えてましまさず
神德量りなかりけり
智慧深明にましまして
大千界を震動す